

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：82620

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06885

研究課題名(和文)江戸時代における初期文人画の基礎的研究 中国絵画学習とその地域性について

研究課題名(英文) Fundamental research on early literati painting in the Edo Period: the traditional instructional methods for teaching painting in China, and regional variations

研究代表者

安永 拓世 (YASUNAGA, Takuyo)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・研究員

研究者番号：10753642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、江戸時代の初期文人画家を代表する祇園南海・彭城百川・柳沢淇園の三者について取り上げ、その表現における中国絵画からの影響と、彼らの文人交流における地域性について考察した。

まず、三者の作品の悉皆的な調査と詳細な写真撮影をおこない、署名・印章・款記・賛・表現等の基礎的なデータベースを作成した。そのうえで、三者がどのような中国絵画を学び得たのかについて分析し、三者の表現の地域性についても検証した。さらに、こつした初期文人画家の表現や、中国絵画学習の成果が、池大雅や与謝蕪村をはじめとする後世の文人画の表現に、どのような影響を与えたのかについても、今後の展望を示した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I picked up the three members of the Gion Nankai, Sakaki Hyakusen and Yanagisawa Kien who represent the early literati artists in the Edo era, and examined the influence from Chinese paintings in that expression and the regionality in their literary exchanges. First, I conducted a comprehensive survey of the works of three artists and took detailed pictures, and created a basic database such as signature, seal, expression. Next, I examined what kind of Chinese paintings the three were able to learn and pointed out the regionality of the expression of the three. Furthermore, I showed the future prospects of how these three persons' expressions and the results of Chinese painting learning have influenced the expressions of literati painters of later era such as Ike Taiga and Yosa Buson.

研究分野：日本美術史

キーワード：祇園南海 彭城百川 柳沢淇園

1. 研究開始当初の背景

江戸時代の初期文人画に関する先駆的な研究としては、田中喜作『初期南画の研究』(1972年)があり、また、初期文人画家を代表する祇園南海(1676~1751)、彭城百川(1697~1752)、柳沢淇園(1703~58)の三者の個別研究としては、植谷元「祇園南海年譜」(1959年)、ジェームス・ケーヒル「彭城百川の絵画様式」(1976~79年)、橋爪節也「柳沢淇園とその人物図」・「柳沢淇園筆花果図について」(1989~90年)などがある。

これらの中で、中国絵画からの影響を具体的に論じたものとしては、ジェームス・ケーヒル氏の研究が挙げられるが、ケーヒル氏の示す彭城百川の事例が、必ずしも他の二者にあてはまるわけではなく、三者それぞれの地域や人的交流に即した、より具体的で個別的研究が求められている。

江戸時代の初期文人画研究は、現在やや停滞している傾向にあるが、近年は、祇園南海の新出作例が相次いで発見されるなど、個別の画家の作例や、画業の具体像についても、徐々に明らかになってきている。その意味で、あらためて初期文人画家の作例に関する悉皆的な作品調査が不可欠である。

研究代表者はこれまで、江戸時代に和歌山で活躍した文人画家である祇園南海、桑山玉洲(1746~99)、野呂介石(1747~1828)について、順次、その作品の調査と研究をおこなってきた。彼ら三者は、同じ和歌山という地域で活躍した紀州三大文人画家であるが、その活躍時期は、南海が17~18世紀前半、玉洲が18世紀後半、介石が18世紀後半から19世紀前半といったように、それぞれ異なっている。こうした三者の活躍時期は、日本の文人画の展開における、前期・中期・後期の時期と呼応しており、三者の中国絵画学習の具体的な様相は、和歌山という同一地域における時代差を知るうえで、重要な指標となった。

そこで、今後は同時代における地域差にも考察を広げる必要があると考え、南海、百川、淇園というほぼ同時代に、紀州、名古屋、奈良という異なる地域で活躍し、かつ日本の初期文人画家を代表する人物を取り上げるという着想に至った。

研究代表者は、祇園南海に関する調査研究を進めてきた過程で、いくつかの新出作例を発見し、中国絵画学習のあり方を紹介してきた。ただ、紀州画壇の中でのそれらの位置づけや、後の時代への影響については、研究を進めたが、同時代の初期文人画家の表現との比較については、まだ、考察の余地がある。こうした南海研究の成果を、さらに発展させ、百川や淇園、その他、同時代の画家たちの表現や中国絵画学習のあり方と比較することで、初期文人画家たちの同時代性や地域差が、より明確になると考えた。

2. 研究の目的

江戸時代の絵画研究において、中国絵画からの影響とそのアレンジに関する時代的・地域的な考察は、きわめて重要な問題である。ここでは、江戸時代の文人画家のネットワークにおける中国絵画学習の様相を解明することで、その表現の時代差と地域差を再検討した。

具体的には、江戸時代の初期文人画家として位置づけられる祇園南海・彭城百川・柳沢淇園の三者について、現存作品の悉皆的な調査をおこない、その表現における中国絵画からの影響を抽出し、三者が活躍した地域との関連性や、文人ネットワークとの交流を明らかにした。

さらに、彼ら初期文人画家の表現が、次世代の文人画家、とりわけ、池大雅や与謝蕪村といった日本の文人画を大成する画家たちに、どのように継承され、また、中国絵画学習の状況がどのように異なるかについても、考察を及ぼした。

3. 研究の方法

祇園南海・彭城百川・柳沢淇園のうち、百川と淇園については、近年展覧会なども開催されておらず、その作品が紹介される機会も少ない。そこで、まずは、過去の展覧会図録や、展覧会を開催した博物館・美術館などの情報を参考に、それぞれの画家の作品の所在情報について調査した。そのうえで、所在が判明したものについては、順次、実作品の悉皆的な調査と、詳細な写真撮影をおこなった。

こうして得られた作品に関する情報を、基礎的なデータベースとしてまとめ、落款・印章学的な考証に基づいて、作品の真贋を整理し、それぞれの画家の絵画表現における特徴を明らかにするとともに、中国絵画からの影響とみられる要素を抽出した。

さらに、中国絵画に基づくとみられる要素を詳しく分析し、どのような中国絵画に学んだ可能性があるのかを具体的に示すことで、地域的、あるいは時間的な観点から、そうした中国絵画に三者がアクセスしえたのかについて検討した。

また、三者の中国絵画学習の様相を具体的に比較し、その共通性と差異を抽出したうえで、共通性と差異が、中央との結びつきによるものなのか、地域に根ざした特徴なのか、その人的交流や文人ネットワークとの関係の中で読み解き、考察を加えた。

4. 研究成果

まず、研究代表者がこれまでおこなってきた祇園南海の研究を続け、落款は無いながらも、南海筆と伝えられてきた「山水図巻」(東

京国立博物館蔵)の表現の再検討をおこなった。そのうえで、「山水図巻」が、南海の真筆である可能性が高いことを指摘し、同図の表現の中に、熊野の実景に基づいた真景表現と、中国絵画学習に基づく表現が併用されていることを解明した。こうした表現が、池大雅や与謝蕪村をはじめとする後世の文人画の山水表現に、どのような影響を与え得たのかについて考察するとともに、南海の表現の独自性とは何なのかを検討した。

次に、初期文人画家の三者の悉皆的な作品調査については、南海の作品を合計17件(掛軸12件、画卷2件、メクリ3件)、百川の作品を合計90件(掛軸65件、屏風6件、襖1件41面、小襖1件2面、屏風内貼交5件、画卷1件、画帖1件、額5面、絵図2件、書簡1件、短冊2件)、淇園の作品を合計96件(掛軸64件、卷子1件、屏風1件、額1面、屏風内貼交20件、版本1件、印譜2件、書簡5件、日記1件)調査し、その全図・部分図の詳細な写真を撮影し、その写真資料をもとに、データの整理と、各作品情報のデータベース化をおこなった。そのうえで、三者の落款や印章を細かく分析することで作品の真贋を峻別するとともに、三者の主題や表現の特徴、様式について分類した。

その結果、南海については、主題的にみると、山水、人物、四君子(梅蘭菊竹)ともに作例はあるが、山水表現においても、人物表現においても、実見した中国絵画がある程度限られるためか、その影響が、かなり直接的に南海自身の表現にもあらわれ、また、四君子については、黄檗画僧や来舶画家などの作例からの影響がうかがえることが明らかになった。

また、百川については、主題的にみると、山水、人物、花鳥ともに作例はあるものの、その表現からは、中国絵画の表現に依拠した文人画風の作例と、俳画風の作例に大別でき、文人画風の作例では大半が山水で、俳画風の作例に人物や花鳥が多いことがうかがえた。さらに、中国絵画からの影響を受けた文人画風の作例では、これまで想定されてきたような、中国の明時代や清時代の絵画のみならず、宋時代や元時代のより古典的な中国絵画からの影響も、少なからずうかがえることが判明した。

淇園については、主題的にみると、人物と花鳥が大半を占め、山水についてはほとんど作例が無いことも、あらためて浮き彫りとなった。さらに、その表現からは、人物画には、たしかに黄檗画僧などの黄檗系の中国絵画からの影響が顕著にみられるものの、中国の宋時代や元時代の羅漢図からの影響もうかがわれ、また、対する花鳥画には、沈南蘋の影響を受けた南蘋派や長崎派の画家たちからの影響がみられることを解明した。

一方、三者の文人交流における地域性については、漢詩文集や日記や書簡といった史料の記述を中心に検討することで、いくつかの

知見を得ることができた。

まず、南海については、漢詩文集に登場する詩文の応酬から、黄檗僧との交流を追跡してみると、そうした交流が、紀州に限らず、かなり全国的に展開していることが明らかとなった。また、紀州藩の藩士とも当然ながら交流が確認されるが、このような紀州藩内での交流には、一度藩内で塾居させられて、10年後に赦免され、その後藩校の教授になったという南海の藩内での地位が深く関係しており、藩内での文人交流が、必ずしも一様ではないこともあらためて確認された。また、一方で、唐金梅所などの豪商との交流も指摘でき、中国絵画の入手や学習に関しては、むしろ、そうした豪商などとの交流が重要であった可能性も想定された。

次に、百川については、絵画資料の中に記された賛や俳句から、俳人たちとのネットワークがかなり具体的に判明し、やはり、名古屋や伊勢の俳諧師と、密接なネットワークを持っていることがうかがえた。かかる俳諧師たちとの関係は、俳書などへの参加や挿絵の提供からもうかがえるが、中国絵画学習との問題では、百川の次世代の画家である与謝蕪村が、同じく俳諧師のネットワークの中で絵画制作をおこない、そこに中国絵画に依拠した図様や典拠を多く用いたこととも関連することが推察された。そうした俳諧師が、中国絵画に関する知識をどれくらい共有し、中国絵画の受容や入手に、どの程度関わっていたのかについては、今後、百川と蕪村の共通性と差異を考察していくことも有効となる。

最後に、淇園については、京都や大坂の文人たちとの交流が、たしかに盛んではあるものの、一方で、日記や書簡からは、甲斐や大和郡山といった淇園が所属する藩の地元の文人たちとの交流も、かなり積極的におこなっていることが浮かび上がってきた。それには、淇園自身が藩の重職に就いていたこととも関係していると想像されるが、南海の場合と同様、藩内での淇園の地位や立場が、こうした文人交流にも影響している可能性が高いこともうかがえた。

そうした意味で、南海や淇園の文人交流のあり方は、百川の文人交流と、地域的のみならず、身分的、質的にも明らかに異なっており、文人交流の地域的な差のみならず、画家の身分や地位などの問題も重要であることが、あらためて浮き彫りとなった。

なお、三者のこのような文人交流における地域的、身分的、質的な差と、中国絵画学習に関する問題が、どのような関連性を持つのかについては、いくつかの事例を示したものの、具体的な考察を十分に加えられなかった点もあり、今後の大きな課題といえる。

また、三者の中国絵画学習に関しては、中国の明時代や清時代の作例のみならず、宋時代や元時代の比較的古典的な中国絵画を学習している成果もうかがうことができたが、

それに関しては、当時の狩野派内で、中国絵画の古典的な図様はかなり蓄積され、共通認識となっていたことが想起される。三者が、かかる古典的な中国絵画の図様にアクセスできた過程としては、何らかの中国絵画に接した可能性とともに、初期文人画家における狩野派学習の問題なども考慮する必要がある、今後の課題である。

そのほか、今回の研究で取り上げた三者の初期文人画家の表現が、次世代の画家の表現にどのように継承されたのかも重要な問題といえる。今回は、南海と大雅、百川と蕪村については若干の検討をおこない、いくつかの試論を提示したのみだが、今後は、淇園と大雅などの関係についても、さらなる検討を進める必要があり、地域や身分、文人交遊圏などを視野に入れた、より具体的な研究が求められる。

こうした今後の研究を展望したうえで、本研究は、日本の文人画研究の最も基礎的な作業として、有効であるとみなせよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計5件)

①安永拓世「与謝蕪村筆「十宜図」について」第1回表象文化研究会研究発表会、2016年11月26日、青山学院大学(東京都・渋谷区)

②安永拓世「野呂介石の交友と門人—紀州画壇への影響を中心に—」特別展「城下町和歌山の絵師たち—江戸時代の紀州画壇—」講演会、2016年11月12日、和歌山市立博物館(和歌山県・和歌山市)

③安永拓世「江戸時代の山水画に見る材質効果と筆墨表現—文人画を中心に—」大和文華館特別講演、2016年3月20日、大和文華館(奈良県・奈良市)

④安永拓世「与謝蕪村の絵画に見る和漢」東京文化財研究所第49回オープンレクチャー、2015年10月31日、東京文化財研究所(東京都・台東区)

⑤安永拓世「伝祇園南海筆「山水図巻」(東京国立博物館蔵)について」美術史学会東支部例会、2015年7月25日、東京大学(東京都・文京区)

[図書] (計1件)

①『中国国華博物館国際交流系列叢書 東方画藝 15至19世紀中韓日絵画』時代出版伝媒股份有限公司北京時代華文書局、2016年(安永拓世「祇園南海 熊野勝景図巻」

pp.74-79、安永拓世「野呂介石 松溪清暑図軸」pp.84-85)

[その他]

ホームページ等

<http://www.tobunken.go.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安永 拓世 (YASUNAGA Takuyo)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・文化財情報資料部・研究員

研究者番号：10753642